創立60周年記念号の刊行に寄せて

長崎外国語大学・長崎外国語短期大学
学長 池田紘一

長崎学院は、原爆の傷跡も生々しい1945年12月、長崎ＹＭＣＡを母体に船出した。創設を促したものは、戦争に対する深い反省とキリスト教的人間愛の精神であり、日本再建のためには、そしてまた世界の平和と人類の共存共栄のためには外国語を学び世界的な教養と視野を身につけた若者の育成こそ急務であるとの信念であった。当初は長崎外国語学校として出発し、1950年に長崎外国語短期大学米英語科の設置認可を受け、その後外国語学科に改編されてフランス語とスペイン語の専攻が加わり、1990年には国際文化学科に衣替えして一層の充実を見た。さらに1996年には現在の新キャンパスに移転し、併せて学院創立50周年を祝った。

そして2001年4月、学院は新しい時代を迎えた。短期大学の伝統を礎に、長崎外国語大学が誕生したのである。外国語学部国際コミュニケーション学科には、現在では英語アメリカ文化コース・英語イギリス文化コース・ドイツ語ドイツ文化コース・フランス語フランス文化コース・スペイン語スペイン文化コース・中国語中国文化コース・日本語日本文化コースの7コースが存在している。大学発足と同時に短期大学は英語学科に改組され、短期の実践的英語教育の一層の充実を目指して新たな道を歩み始めた。こうして長崎学院は大学と短大を擁して、2005年12月、創立60周年を祝うに至ったのである。

「長崎外大論叢」第10号はこのような学院の60年にわたる歴史を記念するものである。本論叢は大学と短大との合同の研究発表誌であり、その第1号の発刊は大学が開設された2001年の6月に溯る。しかし、これには短期大学時代の長い前史がある。旧長崎外国語短期大学の紀要「長崎外語短大論叢」は、その第1号が1955年に発刊され、1960年の第5号からは誌名を「論叢」に改め、2001年1月に最終号として第56号を刊行した。今日の「長崎外大論叢」はいわばこの伝統を引き継いで、新たに発展させたものである。

大学教員は教育と研究の二つの役割を担っている。研究者としては専門の学問分野ないしは学界に属し、学問研究そのものの進展に寄与すると同時に、他方では授業を通じて学生の教育に従事しなければならない。今日の大学大衆化の時代においては教育の占める比重は一段と高まっている。大学院ならともかく、学部や短大においては教育はいわば最大の課題である。このような状況の中で、教育と研究をどう両立させるか、教育と研究をいかに関係づけるか、これはたしかに難問である。しかし私は依然として教育と研究は表裏一体のものであり、研究は教育のあらゆる場面に濃淡さまざまの光を投げかけるいわば光源のようなものであると考えている。専門的研究成果を直接授業に反映するのでなくとも、絶えず何ものかを「探求」し続けている教員の姿勢が広い意味での学生の教育にもたらす効果は測り知れない。

「長崎外大論叢」はいわゆる紀要である。紀要については多くの目に触れることのない閉鎖的な仲間内のものだという批判もある。国内、国外の学会誌に発表する、あるいは出版の形で成果を世に問うことが重要だというのである。その重要性には全く異存はないが、しかし、紀要もまた依然として

大きな意味を持っていると私は考える。それはまず第一に大学の顔であり、大学が全体として絶えざる研鑽を続けていることの証である。第二に、多様な専門領域の成果が一堂に並び立つということには学会誌にはない大きな意義と魅力がある。第三にそれは、一大学として教員が互いに切磋琢磨する場でもある。個々の研究は学界に直結しているばかりでなく、大学という研究者集団にも属しており、そうであってはじめて大学は一大学として、多彩な研究者が強い精神的連帯意識をもち高い目標を掲げて学生の教育に当たる場としての十全性を獲得するのである。紀要の論考は教員個々人にとっては、いずれより大きな形で国内外の学界や世に問う研究の貴重な糧となればよいのである。

そのような意味で私は本記念号の発刊に喜びを禁じえない。しかも、全教員 42 名中 29 名が執筆している。ここには記念号に対する各人の思いと研究への一致した新たな意気込みが窺われる。本誌の今後の発展が期待されるばかりでなく、大学、短大の一層の充実が予感される。

さらに特記すべきは、巻頭に緒方純雄先生（同志社大学名誉教授）の玉稿をいただいたことである。緒方先生は日本基督教団長崎馬町教会伝道師を務められた 1946 年から 1949 年の間、本学草創期に宗教主任兼講師として貢献された。「真理と自由」は、昨年 12 月の創立 60 周年記念祭の招待記念講演を基に成ったものであるが、本記念号はこれによってその名に相応しい輝きを帯びることになった。また、中島敦『名人伝』の英訳をご寄稿いただいたロレンツ（Loretta Lorenz）先生は、20 年の長きにわたって本学に奉職され、本年 3 月をもって定年を迎えられる。その意味で本号は奇しくも先生を記念する号ともなった。緒方先生、ロレンツ先生に深甚の謝意を表する。